

令和3年度

福祉体験作文

コンクール

作文集



©しゃらんちゃん



弥富市社会福祉協議会



この冊子の一部は、愛知県社会福祉協議会の『福祉でまちづくり総合推進事業助成金』により作成しております。

ごあいさつ

このたび、六回目の実施となる本会主催の福祉体験作文コンクールに、市内各校より多数の福祉体験作文をお寄せいただき、誠にありがとうございました。優秀作文を作文集としてまとめさせていただきましたので、お手に取ってご覧いただくと幸いに存じます。

さて、今年も新型コロナウイルスが猛威をふるっており、さまざまな学校行事が中止・延期となっております。市内各校で実施する福祉実践教室も接触を伴わない形の『講話』を主体で実施しました。それに伴い、実践を通して福祉に触れ合う機会が多く失われてしまいました。そのような状況下であっても、自分から福祉に関する『発見し、考えてみる』ことや、『行動をおこした結果、感じたこと』が作文にまとめられており、意義深いものであったと感じております。

どの作文も素晴らしい作文ばかりでした。切り口は違いますが本質は同じで、他者に対し思いやりの心をもつ姿勢がある、ということでは共通しています。『福祉』とは、『ふだんの ぐらしの しあわせ』であり、その『しあわせ』を手助けする行為が思いやりのある行動と言えます。

思いやりのある行動は、考えることはできてもなかなか実行することは難しいものです。困っている人を見つけても、実行に踏み切れない事があると思います。ですが、あまり難しいことは考えず、殻を破って、まず声をかけてみてください。 「大丈夫ですか。」 「どうしましたか。」 「手伝うことはありますか。」 など状況に応じて変える必要がありますが 「まずは、声をかける。」 ことから始まります。声をかけられた方も助けの必要の有無を答えてくれるはずです。

昨今のコロナ禍で地域のお祭りやイベントがほとんど中止となり、地域間でのつながりが希薄となりつつあります。このコンクールにより、少しでも『福祉』について理解のある若い世代が増えることを望んでいます。そして、その若い世代が他世代の方々に思いやりの手を差し伸べることで、地域の中でコミュニケーションが生まれ、コロナ禍で希薄傾向となった社会をより良く作り上げてくれる地域の大きな力になることを願います。

令和三年十二月

社会福祉法人弥富市社会福祉協議会

会長 八木春美

令和三年度 「福祉体験作文コンクール」作文集

- ・ 最優秀賞 身近な福祉 桜小 学 校 六年 浅田 冬真
- ・ 優秀賞 ワクチン接種ボランティアに向けて 愛知黎明高校 二年 奈良井 睦子
- ・ 秀逸 ボランティア体験で学んだこと 十四山 中学校 三年 永井 杏奈
- ・ 入選 「沈黙」から学んだこと 愛知黎明高校 三年 奥村 菜々未
- ・ 入選 向き合う気持ちと伝える勇氣 弥富 中学校 二年 河村 留奈
- ・ 入選 新たに学んだことと、改めて学んだこと 海翔 高校 一年 重藤 千景
- ・ 佳作 『手話』で『こそごと話』 桜小 学 校 二年 泊 望香
- ・ 佳作 ぼくのお父さん 十四山 東部小学校 六年 鈴木 俊瑛
- ・ 佳作 バリアのない社会へ 桜小 学 校 六年 三田 遥斗
- ・ 佳作 ぼくの福祉体験 日の出 小学校 五年 田上 大聖

☆最優秀賞☆

身近な福祉

桜小学校 六年 浅田 冬真

ぼくはサッカー少年団に入団しています。その少年団では練習が終わると、みんなで一列に並んで指導者さんに向かって「ありがとうございます」と礼をしてから解散します。

その最後の礼をするときに、指導者さんより話がありました。

ぼくたちが練習している時に認知症みたいなお年寄りが道に迷っていて、たまたま練習を見に来ていたぼくのお母さんがその人に声をかけて対応してくれて、無事に家族のもとへ帰ることができたという内容で、ぼくのお母さんの行動は素晴らしくて君たちも様子がおかしかったり困っているような人がいたら声をかけて行動できるような立派な人になってほしいとの話でした。

練習が解散してからその出来事についてお父さんとお母さんに聞いてみました。

お父さんは道路に寒空の中、上着も着ずにくつものはかずに小走りで近づいて来たので、何かの事件に巻き込まれるかもしれないと思って、いっしょに練習を見

ていた妹を守るために、そのお年寄りからはなれて逃げたと話していました。

お母さんはお父さんから逃げた方かいいと言われたけれど、そのお年寄りを見て認知症の方かもしれないと思って「こんにちは」とあいさつをしてから、天気の話や名前や家はどこかなど少しづつ聞いてみたら、家がわからなくなって迷子になっていることが分かったそうです。

そのお年寄りは「すぐその辺の家だから一人で大丈夫です」と少しお母さんのことをしつこい人だなど思っていた感じだったそうです。お母さんは事故に巻き込まれたら大変と思って様子を見ながら話題を変えてずっと話かけていたら、ちょうどそのお年寄りを探していた家族と出会うことができ無事に帰ることができたと教えてくれました。

ぼくのお母さんは老人ホームで働いているので、その知識が役に立って良かったと言っていました。ぼくがその立場だったらどうしていただろうか考えました。

ぼくだったらお父さんみたいに何かの事件に巻き込まれたりしたらこわいから、その場から逃げたいかもしれません。そう思ったときにぼくは冷たい人間だなと思いました。

ぼくだったら逃げていたかもしれないということをお母さんに伝えたら、「朝、学校へ行くときに、たく

さんのゴミ袋を持っているおじいさんがいて、ゴミ出しを手伝っていて、親切なことをしていたよ」と妹がお母さんに伝えていたようで、「こまっぺいそうな人に自分から声をかけてお手伝いができているのだから、冷たい人間ではなく、すごく思いやりのある子だと思ったよ」とほめてくれて、こういうふだんの生活の中でも福祉につながるのかな、と思いました。

そして、ぼくにも出来ることとして、お年寄りや身体の不自由な方、赤ちゃんやお腹の中にいる妊婦さん、ちいさな子を連れてくるお母さんなどに、電車やバスに乗っている時に席をゆずったり、重そうな荷物を持つていたらいっしょに運んだり、まずは何か困っていることがないか勇気を出して声をかけてみようと思います。

もしかしたら大きなお世話だと思われてしまうかもしれません。けれどもその中には、声をかけてくれることを待っている人もいるかもしれません。それから、ぼくは大きなお世話と思われるでもいいから、何か困っていることはないか、ぼくでもお手伝いができるようなことはないか、断られたりすることもあるかもしれないけれど、へこまずに何度でも声をかけてみようと思いました。

そして、ぼくは世の中が、親切や優しさ、思いやりの心でいっぱいになるといいなと願います。



☆優秀賞

ワクチン接種ボランティアに向けて

愛知黎明高校看護科 二年 奈良井 睦子

新型コロナウイルスの感染拡大が続き、高校入学二年間は、これまでとは全く違う生活を送ってきた。人に会えず、出掛けられず、いろいろな考え方や行動の仕方を根本から改めなくてはならない毎日だった。看護科に進み、人との関わり方や看護とは何か等を実習などで学ぶはずだったのに、なかなかできず、皆がそれぞれでの立場で、不安の中で過ごしていたと思う。そんな中、新型コロナウイルスの「特效薬」として、ワクチン接種が始まり、元の生活に少しでも近づけるのでは、と期待が高まっている。

そんな時、学校から「ワクチン接種のボランティアに参加する」という話があった。不安もあったが、参加したいと思った。私は中学校の頃に時々、母の職場である障害者福祉施設でボランティアをしてきた。施設の行事に参加して、視覚障害者の方に危険のないよう手を引いて歩いたり、持ちにくい荷物を運んだり、簡単な手伝いをした。その時に「ありがとう」と言われたり、嬉しそうな笑顔を拝見したりし、自分も嬉しくなった。特別なことはできなくても、相手の思いを

知り、その思いを叶える方法を一緒に考えて、実際に行動すれば喜んでもらえる、それがボランティアになるかもしれないと思っている。

今回のボランティアの前に、事前にワクチン接種について学習した。ワクチンには、二つの効果がある。一つ目は、感染症の発症または、重症化を予防し、個人が守れる。二つ目は、免疫を獲得し、感染しない人が増えると、集団免疫となり免疫を持たない人も守れる。しかし感染症の予防では、ワクチンの効果だけでなく「副反応」も理解した上で、一人一人が接種するかどうかを判断できるようにする。また、ワクチン接種に頼るばかりでなく、すべての感染症の予防として、基本的な生活習慣を維持し、体調管理を行い、免疫力をつけること、手洗い・うがい・手指消毒・換気などを習慣化して行っていくことも重要である。つまり、ただ、接種のための介助だけでなく、ワクチンとは何かを説明できるような知識と伝える力も必要である。

ボランティア前の予防接種訓練は、実際に会場となる建物で行った。一階の待合所から少人数で六階に上がり受付し、三階に行き接種し、経過観察をするという流れを確認した。一方通行であり、接触を回避していたが、どこまで間隔を詰めて良いのが分からず、密になっっている部屋もいくつかあるように感じた。接種会場に来た人は始めて来る場所なのだから、少しでも不安を取り除いてあげたい。最後の十五分間を待つ

場所では、体調の管理、副反応の確認をした。頭痛、関節や筋肉の痛み、寒気、発熱やアナフィラキシーなどの副反応の早期発見・対応のために、接種を受けた一人一人の様子をしっかりと観察する必要がある。訓練の前は、自分たちも接種の介助といっても、何をどのように行うのか分からず、とても不安であった。事前の訓練で、流れが分かったので、その内容を来る人にしつかりと説明をしたり、「次はこのようなことをしますよ」などと声を掛けたりすることが大切であると感じた。相手が困っていそうであれば積極的に声を掛けていきたい。実際のボランティアでは、どの役割になるかわからないが、その場所のできることを考えて、自ら行動していきたい。分からないことがあれば、チームワークが大切なので、担当のスタッフの方に早めに相談して、安全・安心に接種がすすむように看護学生として関わりたいと考えている。

ボランティアに参加する日は、人の命に関わることだという意識を持って、真剣に取り組みたい。しかし、自分が緊張し過ぎて不安になると、相手にも不安が伝わってしまうので、できるだけリラックスして笑顔で接するよう心掛けようと思う。

私たちはボランティアに参加する前に、希望者全員がワクチン接種を受けた。家族では障害者福祉施設につとめる母の次だが、多くの人と関わる仕事の父よりも早い。

そのときは、自分たちが感染するといけないから先に接種すると思っていた。しかし今、ボランティアをする立場に立って、そうではないと感じている。自分が接種することで、そのときに何が心配になるか、困ることは何か、その後どんな反応が起こるのか、それを前もって体験して「大丈夫です。安心してください。」と言えることが大切だと思う。

今回のワクチン接種ボランティアを通して、ボランティアとは、「やってあげる」ではなく、人として、相手のことを一生懸命に考えて接していくことだと思つた。一緒に時間を過ごし、共に考える。自分自身も人と接することで経験が増えて、人として成長できる。そんな思いを忘れずに今後もボランティア活動に参加できればと思う。



◎秀逸

ボランティア体験で学んだこと

十四山中学校 三年 永井 杏奈

私はとても猫が大好きです。なので、保護猫を三匹飼っています。一匹目は猫の譲渡会。二匹目は、保護猫施設。三匹目は田んぼにいた子猫を保護しました。私の家にいる猫はすべて保護猫です。

私は、猫を飼いたくて仕方がなかったのでペットショップに行くたびに「飼いたい」とお母さんに何度もお願いをしました。飼うことを許してもらえませんでした。そんなある日、テレビで動物の番組が放送されてきました。そこに「保護猫」というキーワードが出てきました。私は今までペットショップにいる猫がすべてだと思っていました。しかし、実際は違うということを知りました。

「保護猫」とはどのような猫なのか。私は気になって仕方がなかった。ネットでお母さんと一緒に調べてみることにしました。保護猫とは、野良猫や捨て猫など身寄りのない猫のことです。保護した猫達は、個人宅などで一時的にあずかり、お世話をします。譲渡会はこういった猫達を引き取り新たな家族を探す会です。私はこのことを知り、お母さんと猫を飼うなら

保護猫を迎え入れたいねと考えるようになりました。また、日本は猫の殺処分も世界的に多いことを知り衝撃を受けました。

猫を最後まで責任をもってお世話をすること、避妊、去勢をするなどのいくつかの約束をし、念願だった猫を飼うことができました。言葉に出来ないほどうれしかったことを覚えています。

譲渡会ではケージに入った成猫が二十四匹いました。猫達は慣れない場所や人達で少し怯えた様子でした。譲渡するにはいくつかの厳しい条件があります。同居人全員の同意、家族の一員として責任と愛情をもつ、避妊、去勢手術をするなどです。私は、この沢山の猫達の中から家族にしたいと思った猫を選びました。譲渡会の主催者、協力者の人達は、ボランティアとして猫の保護活動をしています。私はこの活動を知り、驚いたことがあります。それは、猫を保護し、譲渡をすることが「仕事」だと思っていたことです。しかし、実際は「ボランティア」つまり、自分の意思で参加し、無償で猫の命を救ってくれているのです。このことを知って、私は、自分に何か出来ることはないかと考えました。その結果、「ボランティア」に参加してみることになりました。私は最初の猫を譲渡してもらった団体のSNSを応援しています。ある日、そこには「多頭飼育崩壊」という投稿がありました。偶然にも自分の家の近くだったのでボランティアに参加したいと思い

ました。しかし、心の中で、中学生で何も経験や知識もないし迷惑にならないかな、手助けがしつかりできるか、など不安でした。しかし、私の中で「猫を助きたい。」「ボランティアの方々の手助けをしたい。」という思いが大きく、思い切ってボランティアに参加したいとメールを送りました。来た返信には「おそうじ、お手伝いお願いできますか」と書かれていました。私は夢かと思うくらいとてもうれしかったです。なぜなら今まで画面越しでボランティア活動の姿を見ているだけだったのに、自分が現場に行ってお手伝いが出る日が来たからです。私は「よろしくお願いします」とすぐに返信しました。

現場に到着すると、部屋中、尿や便のきつい臭いにびっくりしました。その部屋には、およそ三十四匹もの猫がゲージに入れられていました。この猫たちを見て、「かわいそう」とかではなく、「どうして、なぜ」という疑問が出てきました。去勢、避妊手術をすれば今よりももっと被害を防ぐことができたはずです。色々な思いが込みあげてきました。ボランティア団体の人は、黙々と現場の片付けや掃除をしていました。その背中を見て、とても尊敬しました。沢山の片付けをしながら「大丈夫」「いい子だね」と猫に声をかけていました。猫達のために、現場を早くキレイにしてあげたいという思いが伝わってきました。その姿を見て私は一生懸命お手伝いをしました。

今回、猫のボランティア活動に参加して、命の大切さを感じる事が出来ました。ペットを飼う時には、最後の時が来るまで、愛情と責任を持って飼うこと、しつかり去勢、避妊手術をすることなど学んだことがたくさんありました。私は、今いる猫三匹を責任と愛情を持って世話しようと思えました。

私は、今度障がいのある子供達が居る施設のボランティアに参加します。そこでも沢山学び、感じたことを今後に生かしていきたいです。



〇人選

「沈黙」から学んだこと

愛知黎明高等学校看護科 三年 奥村 菜々未

私は話しかけることが苦手です。しかし、看護師にはコミュニケーション能力が必要不可欠です。今回、患者さんと積極的にコミュニケーションを図ることを目標に実習に臨みました。

初日に受持ち患者がAさんに決定し、早速ベッドサイドへ向かいました。第一印象が大切だと思い、笑顔で挨拶し自己紹介をしました。けれどAさんの表情はピクリともせず、「お願いします。」と一言、小声で話されただけでした。その瞬間、一気に不安と緊張が高まりました。それでも、こんなことでつまづいていたらいけないと思う一心で入院生活について伺ってみたものの暫く続く沈黙。それがとても重くて戸惑っていると、指導者さんが「Aさんは気持ちの変化が大きくてお話しするのが難しいから、無理しなくてもいいよ。傍にいてもらえればいいから。」と助けて下さいました。その一言のお陰で少し心が軽くなりましたが、後悔のない実習にしたいと思えました。その後も何度か声を掛けてみましたが、帰ってくるのは一言二言だけです。そこで『どうしたら会話になるのだろうか』と考えてみました。Aさんが戸惑ったような表情をされているのに、情報を得たいがために簡単に答えられない質問

ばかりしていたのです。Aさんは答えにくくて困っていたと思います。それでも自分の実習課題のために情報を聞き出すことばかり考えていて、Aさんの戸惑いに向きあっていませんでした。初対面の人に、いきなりグイグイ質問されたら「嫌だな」「ちよつと怖いな」と感じるのは当たり前です。きっとAさんもそう感じたのではないかと振り返った初日でした。

それから質問攻めにならないように間を置きながら“はい”と“いいえ”で答えられる簡単な質問にしました。しかし、それでも会話は弾まず、不安は募る一方でした。私はAさんの表情やしぐさを見落とさないように意識して観るようになりました。

すると、一人ではできなかった車椅子への移乗が、リハビリの成果で少しずつできるようになっているのに気づきました。「リハビリ、頑張っているの足力が戻ってきていますね」と思わず声を掛けていました。それに応えてAさんが大きく頷いてくれました。この一瞬、沢山の言葉ではなかったけれど通じ合えたような喜びがありました。

数日後のことです。リハビリを終えたAさんが小聲で「今日はいいい天気だね」と話しかけてくれました。嬉しくって「そうですね」と返すと、初めて笑顔を見せてくれました。今日までの沈黙の息苦しさが一気に溶けて、肩の力も抜けました。暫くの沈黙の後、噛みしめるようにリハビリのことや家族のことをポツリポ

ツリとお話ししてくれました。沈黙がこんなに重いものと感じたのは初めての経験でした。沈黙はAさんが伝えたいことを考える間であつて、この沈黙が大切であると感じました。その間はとても不安でしたが、Aさんが自ら話を切り出してくれたという安堵から不安や戸惑いが小さくなっていきました。

二週目に入り、いつものように病室へ伺うと「○○さんだ。」と名前前で呼んでくださいました。「毎日来てくれたから覚えたよ」と。Aさんもこのコロナ禍で家族と面会ができず寂しい思いを募らせていたのでしよう。そんな時に実習生と関わることでその寂しさが和らぎ『自分は一人ではない、自分を見ているから』と思ひ、心の扉を開いて頂けたのではないかと考えました。名前を呼んで頂けた驚きと喜びを今でもはつきり覚えています。毎日名前を名乗ってから挨拶をしていたこと、そんな小さな積み重ねの大切さを教えてくれたAさんに感謝しています。その後笑顔もよく見せて下さるようになり、Aさんから話を切り出してくれることも増え、初めの頃の不安が嘘のように無くなり、実習を無事に終えることができました。

私は話しかけることが苦手です。誰とでも気軽に話すことができる人に憧れます。何を話せばいいのだろうと考えてしまうし、沈黙をととても重く感じています。けれど今回の実習で、「沈黙」は考える時間やゆったりとした時間を作るために大切なものであることと共に

『患者さんを知りたい』と思うその気持ちはいつか伝わるものということも学べました。

少しずつですが、今何を思っているか表情から読み取ろうと意識することでコミュニケーションの力が少しは、付いたのではと感じています。

コミュニケーションは言葉だけで成立するものではありません。だからこそ、普段の生活で目線や表情、態度、しぐさといった非言語的なコミュニケーションを意識していこうと強く思っています。

〇入 選

向き合う気持ちと伝える勇氣

弥富中学校 二年 河村 留奈

私は、去年、学校の福祉体験授業で手話を体験しました。

まず、みんなで口話クイズをしました。口話とは、口の動きを見て言葉を理解する手法です。同じような口の動きをする「たばこ」「たまご」は、違いがなかなか分かりにくかったです。次に、自分の名前と五十音と部活を手話で表せられるよう講師から学び、自己紹介

を一对一で行いました。耳が聴こえない人とのコミュニケーション、空書、指文字などたくさんあることに驚きました。手話は、文字を指で作るような動きをしたり、体の部位を使って表したり、表情も大切です。

耳が聴こえない人は生活をしていくうえで沢山の苦労があります。駅では、電車が止まったり、遅れたりする時のアナウンスが聴こえなくて、ずっと待たされることがあります。車の音にも気付かず危険なことがあります。後ろから話しかけられても気付けないことや会話についていけないことがあります。地震速報や緊急放送など命に関わる音の情報がわかりません。だから、不安な気持ちになることが多いです。補聴器をしているからといって全ての音が聴こえているわけではありません。全員がヘルプマークや耳マークを身に付けているわけでもありません。聴こえていない不自由さは、外見ではわかりにくいのです。

講師の話聞いて、私は共感できることばかりでした。なぜなら私の左耳は生まれつき高度の難聴だからです。聴こえているのは、右だけです。「右が聴こえているから大丈夫」とアドバイスしてくれる大人もいますが、沢山の音がある中で生活するのは大変です。必要な音を聴き分けなければいけないので疲れます。友達とのコミュニケーションでは、聴き取りしやすいうに右耳を友達の方向に向けなければいけません。小

さい頃、内緒話をして来た子に、「左耳は聴こえないから、右耳から話しかけて」と伝えると、「面倒くさい」とか「聴こえていないなんてウソでしょ」と言われることもありました。私の左耳が聴こえないことは、外見から全く分からないのだから、友達の言葉も仕方ないことだったのかもしれないから、友達の言葉も仕方ないことだっただけなのかもしれないと今になって思います。困っていることを発信する勇氣もすごく大切なことです。

私は、今、クロス補聴器を使用しています。クロス補聴器とは、聴こえない方の音を聴こえている方に電波で飛ばして、片側で両方の音を聴けるようにするための補聴器です。クロス補聴器は、私の音の世界を広げてくれます。でも、雑音まで拾ってしまうので必要な音の聴き分けが困難です。特に放課や掃除の時は、沢山の音が混ざり合うので友達とのコミュニケーションをスムーズに取ることが難しいです。友達の声が聴こえなくて何度か聴き直してしまつたため、私は申し訳ない気持ちになつてしまいます。時には、「もういいや」と言われ会話が終わってしまうこともあります。私の補聴器は、音の大小の調整が出来ないため、スピーカーなど大音量のする物の近くでは耳が壊れそうな感覚になります。また、補聴器を濡らしてはいけないため、雨の日に自転車登校する時は、補聴器を使用することが出来ません。だから、後ろから来た車や自転車に気付きにくいので細心の注意を払います。体育の授業で

は、内容によって補聴器を外して参加します。体育は好きですが、ボールがどこから飛んで来るのかわかりづらいこともありクルクル回ってしまうこともありま

す。難聴は、平衡感覚の乱れが出ることもあります。体の一部だけが困っているのではなくて、連動して他にも困ることがあることを理解して欲しいです。

困っていることや出来ないことを伝えることは、とても勇気が要ります。「理解してくれるだろうか?」「ウソだと思われるだろうか?」「さぼっていると思われませんか?」と考えてしまいます。でも、以前、左耳が聴こえないことをみんなに話しをした時、「自分も片方の耳聴こえてないよ」と話しかけてくれる子たちがいました。その時、私は最大の勇気をもらった気がしました。

インターネットができるようになり、様々な情報や活動を知ることが出来ます。だからこそ、ひとりでも悩まないでいて欲しいです。私は、誰かの役に立ったり誰かを勇気づけられるよう、私が学んだこと、私にしか経験出来ないことや私の思いを発信していきたいと思

〇 入 選

新たに学んだことと、改めて学んだこと

愛知海翔高等学校 一年 重藤 千景

私は、夏休みの七日間を使ってある障害者就労事業所で実習させて頂いた。職員の方は、利用者の方の支援で忙しい中、実習生である私にたくさん技術や仕事の思いを教えてくださいました。その教えて頂いた中で、私が特に心に残り、大切にしたいと思ったことが二つある。

一つ目は利用者の方と真剣に向き合うことだ。このことを教えて頂いたのは、三日目の昼食時のことだ。私はその日、利用者の方と同じテーブルで昼食を食べていた。その時、私の目の前に座っていた方が、箸を握り、皿に自分の顔を近づけてかきこむように食べていた。もちろん、喉に詰まらせてしまうなど、危険が生じる可能性があるのですが、職員の方が止めに入っていた。そして、職員の方は、私の方を向き、「前までは自分で箸を持って皿をつかんで食べることでできていた。」と教えてくださった。職員の方の話によると、今年の二月頃、足首を骨折し、その時期からできないことが増えてきたそうだ。好きだった歌を口ずさむことも減り、食事の様子もその頃から変化が起きたらしい。職員の方は認知症を疑ったが大きな変化は食事の時の行動のみ。これは、もともと障害を持っているた

めに生じているのか判断できない。そんな不確かな疑問では家族の方に言って検査を受けてもらうこともできないと職員の方は言っていた。私はその話を聞いた時、この利用者の方と接するのは大変そうだな、とどこか他人事のように思っていた。しかし、そのあとの職員の方の言葉で私の考えは変わった。「この方がどんなにできないことが増えようと、私達はこの方の今でできることを守っていかなくてはいけない。他の変わりにならない、たった一人の人間なのだから、できないことが増えたからといってあからさまに態度を変えてはいけない。」

職員の方のこの言葉に、私はハッとさせられた。職員の方は、大変だと言わず、その方の今でできることを守ろうとしていた。一人一人の利用者の方に対して真剣に向き合っていたのだ。職員の方の利用者の方に対する気持ちに感動し、自分の考えが愚かであったと気づかされた。

二つ目は、この仕事のやりがいだ。これは、七日間実習をする中で、職員の方を見ていて所々感じることもあった。そこで私は一つ質問させてもらった。それは、「この仕事への思い」だ。この質問に対し、職員の方は、「失敗することも多く、上手くいくことの方が少ないけど、少しでも利用者の方にとってプラスになっていると感じられる瞬間にやりがいを感じている。それが好きでこの仕事を続けられている。」と答えてくだ

さった。この回答を聞けて、私はこの仕事を目指したきっかけを思い出した。介護福祉士として働く母の職場でのたくさんの笑顔、その様子を見て嬉しそうにする職員の方々。私は、利用者の方が楽しく生活を送り喜んでくれる顔を見たい、そして寄りそいたくてこの職を志したので。私が目指している職は、人と直接関わる仕事だから、常に相手のことを考えなくてはならない、本当に難しい仕事である。実習中でも、その光景を目にした。ある職員の方が担当していた利用者の方が、今春、別の担当の方が変わったそうだった。私はたまに、前日にその利用者の方と一緒に行動していたことを伝えると職員の方は私にその利用者の様子を聞いてきた。そこで私が答えると、「自分が担当していた時よりも良くなっているよかったです。」や「元気そうで安心した。」と嬉しそうに話してくださった。他の人にはちっぽけに見えることかもしれないが、このような小さな幸せをやりがいに感じることができる素敵な仕事だと改めて感じる事ができた。

この実習で、新たなことをいろいろ教えて頂くと同時に、私がこの職を目指したきっかけを改めて考えることができた。今後は、教えて頂いたことを活かし、利用者の方を大切にできる介護福祉士を目指して努力していきたいと思う。実際に働きはじめると、失敗して利用者の方を怒らせてしまうこともあるだろう。しかし、利用者の方の嬉しそうな顔や、「ありがとう。」

といたったたった一言に、小さなことで幸せになれる素敵な仕事であることに自信と誇りを持ちたい。

【佳作】

『手話』で『こそこそ話』

桜小学校 二年 泊 望香

わたしは、今年の四月から、おかあさんと『手話』のべんきようをはじめました。きっかけは、わたしが、よくどんなことでも、おかあさんの耳に『こそこそ話』をすることがすきで、そこでおかあさんが、

「それならば、『こそこそ話』ではなく、いえのおとうさんにもおにいちゃんにも話のないようをしられず『こそこそ話』ができる『手話』をいっしょにおぼえよう。」

とていあんしてくれました。二人で、ユーチューブの『手話こうざ』を見て、まい日すこしずつおぼえていきます。今は、あいさつやじこしよかいやあくをまで『手話』でひょうげんすることができます。おかあさんは、なかなかおぼえられないとくせんしています

が、わたしは、どんどんおぼえられます。

このまえ学校に『手話』の先生がきました。わたしはみんなの前で、はじめて『手話』をしました。はじめて『手話』で会話をするということをたいけんしました。クラスのみんなにも

「すごいね。」

「『手話』しってるんだね。」

と言われてとてもうれしかったです。

今はコロナウイルスかんせんぼうしのため、『手話サークル』などになかなか行くことができないので、ほんとうに耳のきこえない『ろうしゃ』の人と『手話』をすることはできません。そのときまでわたしは、もっとたくさん『手話』をべんきようしていきたいと思います。

『手話』をはじめたきっかけは『こそこそ話』でしたが、『ろうしゃ』の人がこまっているときに、すこしでもわたしのおぼえた『手話』がやくにたつたらうれしいです。そして、『ろうしゃ』の人と『手話』のできない人が会話をするのにこまっているときに、わたしが『手話』でつうやくをしてあげたいと思うようになりました。もっともつと『手話』のべんきようをがんばります。

【佳作】

ぼくのお父さん

十四山東部小学校 六年 鈴木 俊瑛

ぼくのお父さんは、三年前の四月に脳こうそくでおれ、左半身マヒの障害者となりました。昨年二月にも二度目の脳こうそくを起こし、再び入院しました。一回目の脳こうそくよりも二回目の方が障害の出方がひどく、まったく話すこともできなくなり、動くこともままならなくなっていました。

そんなお父さんのために、お母さんがまずやったことは、五十音のあいいうえお表を作ることでした。でも、お父さんは文字を指でさすこともできず、最初はおたがいにコミュニケーションがとれませんでした。また、コップから直接水分をとると、むせてしまうので、飲み物は全てとろみがついた物でさらにストローを使つて飲むようにしました。

最初のころは、慣れないことばかりでぼく達はこんわくしました。

お母さんも生まれつき耳が聞こえづらいので、ぼくが間に入ってお父さんの言葉をお母さんに伝えたりしていました。

リハビリのおかげで、お父さんは杖を使えばゆつくりですが歩けるようになりました。

言語障害の方は、今もリハビリを受けていますが、舌のきん肉が弱っているのです、いまだにうまく話すことができません。

ぼくがお父さんと同じ空間にいる時は、よくお父さんから色々なまれます。例えば「水をくんできてくれ。」「その電気を消してくれ。」「とびらをしめてくれ。」などです。ぼくは、「めんどうくさいなあ。」と、思いつつもやっています。

また、我が家の食事からみそ汁などの汁物がなくなりました。なぜかというとお父さんがそれを飲むと、必ずと言っていいほどむせてしまうからです。その姿はとても苦しそうで見ていられません。とろみをつけてもむせてしまうので、お母さんがリハビリの先生に相談して、出すのをやめました。

そんなお父さんの生活は、とてもストレスを感じるし、めんどうくさいし、大変です。でも、そんな風に障害をもってしまったお父さんの気持ちを考えると、やっぱりつらいだろうなと思うし、周りの人に助けてほしいと思うのは当然だと思います。だから、ぼくはいやだなあと思ってもがまんしてお父さんのためにがんばろうと思います。

【佳作】

バリアのない社会へ

桜小学校 六年 三田 遥斗

「バリアフリー」という言葉の意味は「高齢者や障害者が社会生活を送るうえで障へきとなるものを取り除くこと」とされています。スロープや手すりなどの設備を整える物理的な事から制度や意識、文化、情報に関する障へきを除去することを意味します。

僕は九州におばあさんがいて、夏休みと冬休みには毎年会いに行きます。おばあさんは認知症という病気です。

ある年、おばあさんの家に行くとき家の中にいろいろな場所に手すりやスロープがついていました。

「おばあさんが倒れてこないように見ている。僕は座ることも不安定なおばあさんとなりで見守る役目になりました。最初は歩くことができただけで、だんだんできない事が増えて、歩くことも難しくなりました。そして、家の中でも外でも車いすを使うようになり、家の中では、せまいろうかや玄関の段差、とびらの開け閉め、部屋と部屋の間のちよつとした段差も通ることが大変になります。外では、普段歩いたり、自転車では特に感じることにない低い段差、地面のボコボコも障害になり、放置自転車やかん板などスムーズに通行できない原因となる事もあります。」

僕は、学校の体験授業の中で車いすの体験をさせてもらったことがあります。車いすに乗ってコートを周ったり床からマットの上に移動しましたが、マットの段差でさえこえるのがひと苦労でした。少しの間でしたが、車いすでの生活は大変だということが分かりました。

歩くことができないことはとても不便であり、辛いことです。僕は、足を骨折したことがあり、一週間松葉づえでした。今までのように早く移動できないし、運動できないことがとても辛かったです。でもその時クラスみんなが、荷物をもってくれたり、たくさんのことを手伝ってくれました。とても助かったし、なにより気持ちの面でも心強くうれしかったです。

「心のバリアフリー」という言葉があります。意識的な面で一人一人が高齢者や障害者の人のことをしっかりと理解し、相手の気持ちになって考え、協力していく気持ちを持つこともとても大切なことです。

設備の面ではバリアフリー化が少しずつ進んでいたり、交通機関でも利用しやすいようになっていたり、合もありますが、まだまだ高齢者や障害者の人たちが生活しやすいとまではいきません。ルールや制度にも理解が不十分なこともあります。そして設備が整ったとしても、周りの人の心のない態度やマナーの悪さから生活しにくくなってはいけません。

僕の場合は、車いす体験や祖母を通して車いすの不

便さを知ることができ、自分が不自由になった時に周りからの親切な対応と気持ちに助けてもらえました。僕はこれから、僕に何が出来るかを考え、思いやりのある行動を心がけていきたいと思います。そしてだれもが同じように安心して生活でき、すべての人を尊重し、助け合いバリアのない優しい社会になるとよいと思います。

【佳作】

ぼくの福祉体験

日の出小学校 五年 田上 大聖

ぼくは、福祉体験で目の不自由な人に自己紹介をしました。点字がのっている紙を見ながら自分の名前を作り、無事に読んでもらえて名前を分かっってもらうことができて安心しました。世の中にはたくさん目の不自由な人達がいて点字を使うことで会話ができることを学び、もっと点字を使って会話してみたいと思いました。

次にぼくは車いすを体験しました。ぼくは車いすが折りたためることを知りませんでした。これならどこ

でも持っていけるので足が不自由な人達も色んなところに行って散歩したりきれいな景色を見てもらえたりすることができると思い、うれしく思いました。

車いすに実際に乗ってみると操作がむずかしく、思った方向に進むことが出来ませんでした。でも友達に押しってもらうことでスムーズに進むことができて、とても助かったことが印象的でした。その後ぼくも変わって車いすを押しました。段差があり、困っていたので助けてあげることができて良かったです。

今回の福祉体験学習を受けて、人が人を思いやり支えてあげることができれば、みんなが幸せに暮らすことができると思いました。そのためにはぼくが意識を変えて、障がいをかかえた人達や高れい者の人達に目を向け困っていたら助けになつてあげたいと思います。いままでのぼくは少し人見知りで、障がいを持った方に自分から声をかけたりは出来ず遠くから見ていることが多かったです。でも話してみたら、大変そうでも、つらそうでもなく反対にとっても楽しそうに色々な話をしてくれて、ぼくやみんなと同じように楽しく過ごせていることが分かり、遠くから見ただけの少しはなれていた気持ちが今は無くなり、すぐく身近に感じていきます。

ふれ合うことで一人でも多くの人々がぼくみたいに変わってほしいと思います。